

教育者としての大野一雄

高橋和子 (横浜国立大学)

このような機会を頂きましたことに感謝いたします。最初に、私と大野一雄先生との関係をお話します。私はダンスを正田千鶴先生に師事しました。正田先生は江口隆哉さんの弟子であり、大野さんのお稽古を横浜で受けたこともあります。大野先生も江口さんの弟子であったので、その辺も関係あるかと思っています。けれども、大きなきっかけは昨年横浜で大野一雄追悼フェスタがあった時に、今回プレゼンなさった溝端さんから創作舞踊についてお話を頂きたいということで、大野さんが捜真女学校でどのようなダンスの授業をしたのかを調べたことから、このような場に招かれたのかなと思っています。そしてたまたま祖母が明治39年で大野さんと同じ年に生まれ、母が昨年亡くなりまして、大野さんと同じ年に亡くなった、そんな縁も感じております。また、調べていきますと捜真女学校で、大野さんは内面の表現を引き出すような授業をなさっていたということがわかりました。これは今学校のダンス（創作ダンス、現代的なリズムのダンス、フォークダンス）が2012年から中学校で必修になるのですけれども、戦前からそういう「引き出す教育」を明治生まれの方がしていたというのが、今の教育にとっても関係するなと思いました。そういうことも含めて、今回はお話したいと思っています。

初めに私の自己紹介を簡単にします。私は、乳幼児から小中高校生や高齢者までを対象にダンスワークショップをしたり、高校ダンスコンクールの審査員も長年してきました。本務は横浜国立大学で教員養成系の学生への授業や部活指導もしています。私が教えた中で一番有名になったのが近藤良平というコンドルズを主宰している振付家です。そして年に一度は舞台に立っています。この訳は学生には「作品を創りなさい」と言っていますが、私自身がそうしないのはダメかなと思って自分に課しています。昨年母が亡くなったこともあり、大野慶人さんと色んなお話をしたら「面影」という言葉が出たりして、5月に『お母さんの面影』という作品を踊りました。

さて、今日のお話は3つの柱で致します。一番目は「教育・舞踏関連の年表」について。二番目は横浜のミッションスクールの捜真女学校においてどのようなダンス指導をなさっていたのか。三番目はイエスが誕生した生誕劇をクリスマスになさるのですが、その聖劇の指導。そして捜真幼稚

園やご自宅の近くにある上星川幼稚園に長く訪れたサンタさんの役についてです。それらを資料をもとにお話したいと思います。この場を借りて溝端さんから色んなアーカイブの資料をお借りしてこのお話ができることに感謝申し上げます。そして女学校の関連関係者や舞踊家にインタビューしたものをまとめたものが今日のお話になります。それらを総合して教育者としての大野一雄に迫りたいと思います。

まず一番目の大野一雄の「教育・舞踏関連の年表」です。捜真女学校に関わったものについて紹介します。28歳で体育教師として赴任して、25年間勤めます。そして40歳の時に終戦を迎えて、1年間捕虜になった後に日本に戻ってくるのですけれども、そこから聖劇は60年間かかります。49歳の時には国体があってマスを1万人以上に振り付けたりもしています。61歳の時に退職なさいますが、嘱託営繕職、つまり用務員さんとして74歳まで勤めます。ナンシー国際演劇祭に参加したり海外公演も増えて忙しくなることを考え退職なさいます。しかしずっとその後も捜真女学校のクリスマスの聖劇の指導あるいは鑑賞、そしてサンタさんの役を続けて行ってきました。

二番目の捜真女学校のダンス指導についてです。最初にインタビューさせて頂いたKさんの内容を少し紹介します。彼女は捜真中高を卒業後、東京女子体育大学に進まれ、1971年に捜真女学校の教員として戻ってきました。大野さんの在任中の最後の頃の生徒さんになります。大野さんのダンス授業はどんなでしたかと聞いたら、「小太鼓に合わせて動く、何をやっても否定されたことはない」。どんな中身でしたかと聞くと、例えば「花が咲いている、あそこにもここにも。どんな花が想像して動いて？」と淡々と語る大野さんの言葉に必死でついていったそうです。またある時には「わたし」というテーマで体育館の隅からずっと隅まで10人くらいで歩いていくもので、Kさんはその歩みが良かったということで指名を受けて一人でやったのだそうです。本人はとてもし意識しすぎて、何だかさっきの方がいいなと思ったら、大野さんもすかさず「さっきの方がよかったね」と言う。楽しい表現の授業であったし、内面の表現が求められているというふうにも思ったそうです。そして「なりきる」ということが大事だと実感し、先生になってからの自分のダンス授業にも影響があっ

たと語っています。また舞踏家の姿に感動したとして4つの場面をあげています。聖劇に99歳で車いすになっても最後までやってこられたこと。横浜公演の『ラ・アルヘンティーナ』で、日頃の学校で見る先生の姿とは全然違ってとても大きな存在として光り輝くような姿を見たこと。それからピナ・バウシュの公演の最後に大野さんが車いすで舞台に出てきたのですが、ピナが大野さんを「わたしの先生」と紹介した時にとても誇らしく思えたこと。そして上星川にある稽古場を訪ねた時に、プレスリーの曲で踊っている姿。それらが、彼女にとっては印象に残っているそうです。50年前のダンスの授業の「わたし」とはどんなものかをちょっと即興で動いて頂けますかとインタビューの時に頼んでみたら、再現して動けるのです。まるで少女のようでした。驚きました。

このK先生にお習いしたT.Kさん。今は捜真女学校図書館の司書ですけれども、彼女は大学もスキー部に入ってバンバン動く方に興味を持っていたということで、ダンスではない思い出を語ってくれました。捜真女学校にはあの当時から室内に温水プールがありまして、体育はずっと水泳だったし陸上がちょっとあったくらいで、冬になって球技や器械運動やダンスがあったようです。大野さんから直接お習いしていない彼女にとっては、大野さんの思い出というと小学校の時にサンタさんの格好でやってきた大野さん。中高では聖劇の時に化粧をして神様を演じた大野さん。そしてもっぱら彼女にとっては用務員さんとして掃除や花の世話をしていた大野さん。ですから世界的に有名だとは全然知らなかったということです。そして昨年追悼の展示を図書館でやったそうですが、多くの生徒が訪れてくれて感慨深かったと印象を語っています。

このように13名の方にインタビューしたのをまとめ、体育の授業、ダンスの授業、聖劇、サンタさん役のことを、多く語られた言葉からまとめて分類しました。まず体育の授業ですけれども、捜真女学校のある横浜は戦後焼け野原になりました。そこで校庭の草取りをしたり、石拾いをしたり、テニスコートを作った。これは体育の授業で行ったそうです。まだ体育館が出来ていないときには校庭での体操。女学校ということもあってか、とてもおしゃれで憧れの世界のようで、毎週驚きの連続のダンスの授業だったそうです。「お手本のない創作ダンス」などの言葉がインタビューから多く出てきました。そして集団演技を横浜市三ツ沢競技場でやったおりのことです。先週やったのがこういう振りだったからこのようにやると次の週にはいや違う、また次の週には違う。大野さんは壇上から指導しているのですが、考え込むとそこに座ってメモを書く姿があったそうで

す。大野さんの舞踏の作品の作り方は、先ほど溝端さんがおっしゃったように、イメージを膨らませていってはメモを書くという姿ですが、これはもうこの頃からあったのではないかと推測されます。そしてダンスの授業はどんなものだったのかと聞きましたら、基礎運動的なものと即興表現的なものがあり、小太鼓を叩く姿が印象的だったと言います。基礎運動ってどんなのですかということ、たまにしか見本は見せなかったらしいですけど、とてもきれいに動く大野さんの姿があり、生徒達は弧を描いて跳んだり揺れたりするような動きを列で行ったそうです。そして即興表現では、さっき言った「花」や「わたし」の他にも、「肩に鳥を乗せてあっちまで歩いてごらん」とか、「蠅とり紙にくっついた蠅、どうにかして脱出して」とか、「羊水の中の胎児」などのテーマもあったそうです。この時代はタブーであった世界を大野さんは女子生徒に何のためらいもなく行ったそうです。現在社会科の教員である方がこれを鮮烈に覚えていて、彼女は高校生のときお母さんとあまり仲が良くなって、お母さんの事を表現するなんてとても出来なかった。それで動かないでいたら大野さんが「赤ちゃんだと思って、ヨチヨチと、あっちにいるお母さんに手を開いて歩いていきなさい」と真剣に語る。いつのまにかお母さんとのこだわりも忘れその言葉に引かれながらずっと歩いていく。その出来事を彼女は自分が出産するときにまざまざと思い出す。「大野さんはなぜお母さんのことをそんなに思い出していたのか」を、自分が母になって初めて母の凄さや偉大さを実感したと語ってくれました。グループ創作では「川に生えている葦」も表現したそうです。一人目が葦のポーズを取ると、次の人がそれにあう別な葦のポーズを取る。次の人は川面の水というように、10人くらいがポーズを作っていて、それを作品にしていくなような自由な表現をしたそうです。

試験はソロ試験で、指先まで表現することを大事にされて、「踊りはみんな違うんだよ」という大野さんの言葉を覚えていた方も多くいます。また、高校の卒業式の入場行進ですが、エルガーの『威風堂々』の曲で、「ターンタタタ、ターンターン」のリズムに合わせて一歩ずつ足を進めて行く重厚で気品に満ちたものです。大野さんが作りずっと指導してきたこの入場行進も、今は大野さんのような指導をする方がいなくなり、生徒もちゃんと歩けなくなってしまい、2009年にこの伝統は途絶えてしまいました。

写真1は1950年頃の校庭での基礎運動をしているところです。手前の方が大野さんで、先生の見本の動きを生徒達は不ぞろいの制服でみんな必死で動いています。同じ制服をそろえる事は出来ない戦後間もない頃です。ここの校庭の石拾いを生

徒達も懸命にしました。そして体育館が出来ますと、大野さんは端っこで小太鼓を三拍子や四拍子のリズムで叩きながら、ポーズの時には「ダダダダッ」で早く叩く。60年たった今も、この太鼓のリズムは脳裏に刻まれているのだそうです。次にどのような方法で授業をしたのかを聞いてみました。自由に班でテーマを決めて作っていきようなもの。「なりきる」ことを大事にして、形を変えるのではなく気持ちを変えるのだということ。指先までも神経を行き届け全身を使いながら心を表現すること。そしてインタビューしたどなたも言うのですけれども、大野さんの大声を聞いたことが無い。「やっごらん、はいはい」と、出来ない人にも静かに語って動きを誘発したそうがあります。



写真3

に対して生徒は「何で葉っぱがイエス？」と尋ねる人もなく、「大野先生はきっと人形を使って具象的に表すのではなく、抽象的に表したいのよ」と思ったそうです(写真4)。写真5は90年代の大野さんですが、生徒がつけたあだ名の「猿の燻製」や「ミイラ」にぴったりの姿です。



㊤写真1 ㊦写真2



写真2は放課後の部活、舞踊研究会という名称で、1950年代に中学校の有志で作られたそうです。左の端っこにいるのが大野さんで、50名ほどの女子生徒がいます。練習着はお母さんの着物をほどいて作ったドーナツ型の画期的なスカート。クルクル回るとヒラヒラするのがなんとも素敵で、夢中になって踊った生徒達がいっぱいいたようです。

三番目の括りです。クリスマスの聖劇についてです。写真3は1940年代の聖劇の集合写真です。大野さん(左下)も必ず舞台上に立っていました。

80年代になるとだんだん化粧も濃くなってきて、動きも舞踏風に見えます。また大野さんの聖劇の特徴として、葉っぱや花などをイエス様に見立てていたこと。通常は人形や生誕の絵を背景に貼ったりして行う聖劇が多いのだそうです。ある時の練習で、大野さんは庭に八手の葉っぱを取りに行つて、これがイエスだとしたそうです。それ



写真4



写真5

写真6の左側は大野さんで、右側が天使役の高校生です。彼女は卒業後結婚し出産して、一時天使役を退くのですが、大野さんの指名で今も天使をずっとやっています。大野さんの聖劇指導は、登場人物の話(ヨセフや羊飼いや博士など)を延々二時間くらいして、ほとんど動く事はなく終わることもよくあったそうです。この天使役にも、動きをつけたことはなく、自分の言葉で、自分のイメージで演じる事を要求されたそうです。このシーンは大野さんの目に吸い込まれるような感じで天使が演じきった場面だったと語っています。その時彼女には、周りの観客の姿は見えてこなくて、大野さんの目を感じながら踊ったそうです。ちょうどその時のビデオもありまして、この天使役が10分くらいかけて腕をゆっくりゆっくりあげていく場面があるので



写真6

すが、普通、形を与え動きを振り付けてこうしなさいといったら絶対しらせそうな場面を、ずっとなりきったまま本当に慈悲深い感じで、この生徒さんがやっているんですね。まさしく天使に見えました。ビデオでも私はそう感じたのですから、その現場にいた観客には相当なものだったのだろうと思います。

ちょうど直木賞作家の角田光代さんが演劇部で大野さんの指導を受けています。そのことを語った言葉があります。「不思議な踊り、ゆるやかで植物のような動き。激しい動きではないが激しく動くようにしんどい。彼が誰であったのか知ったのは高校を出てからで、私は彼を思うときいつでも背筋を伸ばしたい気持ちになる。自分は何者であるか、どれほどの名誉を得ているか彼は自分から一切触れることが無い。そんなものは彼にはなんの意味もなさなかった。彼はただ彼自身だった。そうした人に出会えた事は決して失うことのない私の財産である。」というふうに、大野さんの印象を述べています。

最後はサンタ役についてです。大野さんはサンタを50年演じてきました(写真7)。100歳まで幼稚園を訪れていて、大野サンタを見て園児は本当にサンタさんがいると信じたようです。サンタ役の大野一雄さんを息子の慶人さんは「一生懸命踊っている」。慶人さんの奥様は「なりきっていて本当にサンタが乗り移ったような感じ」と言っています。大野一雄さんの奥様のチエさんは「化粧やお面をかぶらなくてもいいじゃないと言っても、毎回しっかりと化粧をして行き、怖くて泣き出す子もいたのよ」と。大野さん自身は、子どもが泣くくらいがいいんだと言っていたそうです。サンタさんは普通太めですが、大野サンタはなんかヨロヨロしながら細めのサンタなんですね。車いすになってもサンタさんは訪れました。いよいよ来れなくなってしまった時、園児たちはサンタさんが重い病気であることに気づいていたと言います。そして大野さんが亡くなったのちの2010年の12月には、大野さんの二人の息子がダブルサンタで幼稚園を訪れています。



写真7

最後に教育者としての大野さんの教師像を、インタビューから見てみますと次のような言葉が多く出てきています。若い頃には「敏捷でエネルギーギッシュで、精悍で、颯爽とダンディで、一所懸命」。その一方で「自分の踊りを模索するように、生徒にも自分自身にも問いかけようとテーマを考え、生徒の表現を引き出そうとし、とても幅広い教養の持ち主」であった。生徒にとって、大野さんの舞台は卒業後見るわけですがそれでも、「授業で見ている大野さんとは別人で別世界で溢れるような熱気を感じる。身軽で、大きい存在で、眼差しとか指先の表現、そして音楽の素養、衣裳へのこだわり」があったと言います。大野さんが掲げたテーマは、「世界とか愛とか命、母、思いやり、優しさ」であり、これはダンスの授業でも同様のテーマを生徒たちに与え表現を引き出そうとしています。このことから、ダンスの授業だけの大野、あるいは舞踏だけの大野というよりは、大野自身が一人の存在として、教育や舞台を生きたのだろうと、推測します。

まとめますと、大野さんは半世紀以上にわたって女学校に関わって、ダンスや聖劇を通して形を教え込むのではなくて、真剣な言葉かけによって自分の内面に対峙させて自由な表現を引き出した。教育者であり舞踏家であった大野さんは、謙虚さと奉仕と愛情に満ちあふれた信仰心をもって子どもや生徒に接してきた。その態度は世界的に著名になっても変わることがなくて、人間の可能性を引き出して、生と死の摂理を実行し表現してきたと思います。このような大野さんの姿は、最初にも申しあげましたように、教育や舞踏教育を考えていく上でとても参考になることだと、改めて思いました。ある卒業生がこの一枚の写真8を持ってこられて、大野先生は若いときから慈悲に満ちた姿をしておられる。舞台上でも同じだしサンタ役でも同じだし、世界のどこに公演にいても慈悲深い姿が見られた。だから、内外の方にも受け入れられたのではないのでしょうかとおっしゃっていました。

これで私の発表を終わります。なお、掲載した写真は捜真女学校関係者からも提供していただきました。どうもありがとうございました。



写真8